九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[044] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10227

出版情報：語文研究. 44/45, 1978-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

文学部
教育学部
法学部
経済学部

春日和男教授略歴

大正　四　年二月八日　長野県上伊那郡朝日村赤羽（現在辰野町）に春日政治長男として誕生
昭和十二年三月　第五高等学校文科甲類卒業
昭和十五年三月　京都帝国大学文学部文学科国文学科卒業
昭和二十二年三月　福岡県筑紫中学校（現在県立筑紫丘高等学校）教諭
昭和二十三年四月　福岡経済専門学校教授
昭和二十四年三月　福岡商科大学（現在福岡大学）助教授
昭和二十五年五月　九州大学助教授（第三分校）
昭和二十六年三月　同　（第二分校）
昭和二十八年四月　九州大学文学部講師（非常勤）
昭和二十九年七月　九州大学助教授（文学部）
昭和三十七年三月　文学博士（「存在詞の展開」九州大学）
昭和四十三年七月　九州大学教授（文学部文学科国語学国文学第一講座担当、大学院文学研究科指導教官）
昭和四十六年九月　スウェーデン国およびフランス国へ出張（ストックホルム大学客員教授〈日本語学担当一九七一―一九七二〉その他、昭和四十七年四月帰朝）
昭和四十七年四月　言語学講座兼担（昭和四十七年十二月まで）
昭和五十三年四月　停年退官
　　北九州大学教授（文学部国文学科国語学担当）
昭和五十三年五月　九州大学名誉教授の称号を授与せられる

春日和男教授主要著書論文目録

著書名			
存在詞に関する研究 ―ラ行変格活用語の展開―	風間書房	昭和四十三年	七月
説話の語文 ―古代説話文の研究―	桜楓社	昭和五十年	十一月

論文題目			
古事記の清濁書分について	国語国文一一七号	昭和十六年	四月
現代かなづかいと文法組織	福岡経専論叢 第一号	昭和二十四年	十月
古事記の擬音語	同 第三号	昭和二十五年	十月
原始象徴語への認識	福岡商大論叢 第五号	昭和二十七年	五月
動詞「あり」が融合する動機 ―万葉集と宣命から―	文学論輯 第一号	昭和二十七年	五月
助動詞「たり」の形成について ―「てあり」と「たり」―	万葉 第七号	昭和二十八年	四月
毛利本「史記呂后本紀」覚え書	文学論輯 第二号	昭和二十九年	三月
聖語蔵御本四未曽有経試読	訓点語と訓点資料第二号	昭和二十九年	八月
指定表現の様式 ―発生過程よりの考察―	文学研究 第五十輯	昭和二十九年	十二月
「也」字の訓について ―「ぞ」と「なり」の消長―	国語国文 第二四六号	昭和三十年	二月
「花桜をる少将」における語彙 ―小弓その他―	文学研究 第五十一輯	昭和三十年	三月
下照姫の歌 ―歌格と提示法と―	文学研究 第五十二輯	昭和三十年	十二月
いはゆる伝聞推定の助動詞〝なり〟の原形について	国語学 第二十三号	昭和三十年	十二月
元永本古今和歌集の書写に関する一問題	語文研究 第四・五号	昭和三十年	十二月
碓氷の坂を越えしだに	万葉 第十七号	昭和三十年	十二月
「也」字の訓続考	文学研究 第五十四輯	昭和三十一年	三月
聴覚および視覚による表現 ―「なり」と「めり」との関係について―	文学研究 第五十六輯	昭和三十二年	七月

指定辞「たり」雑考　―特に発生と用法と―　文学研究　第五十七輯　昭和三十三年　三月
三宝絵詞東大寺切管見　―主として関戸家本冊子と観智院本との比較による―　国語国文　第二九一号　昭和三十三年　十一月
草仮名による字音表記　文学研究　第五十八輯　昭和三十四年　三月
ゴトシといふ語の形態と位相　―今昔物語集の用例二三―　文芸と思想　第十八号　昭和三十四年　十一月
続「三宝絵詞東大寺切」管見　―字音語の表記について―　国語国文　第三〇五号　昭和三十五年　一月
カクノゴトシといふ熟語の訓読性　―訓点語と今昔物語集の用例二三―　語文研究　第十号　昭和三十五年　五月
聴覚および視覚による表現　―「なり」と「めり」の消長について―　文学研究　第六十輯　昭和三十六年　三月
ラ変活用語の構成　国語学　第五十号　昭和三十七年　九月
古事記における「如」字の訓について　香椎潟　第八号　昭和三十七年　十二月
慶長十五年閲書　貞享三年書写　五逆秋（無門関抄）の国語学的研究　―序　指定辞の様式―　文学研究　第六十一輯　昭和三十八年　三月
「碓氷の坂を越えしだに」続考　語文研究　第十六号　昭和三十八年　六月
助動詞「けり」の二面性　―竹岡説に思う―　国文学言語と文芸第三十九号　昭和三十九年　五月
「なる」の意味変化―文法上許容に関する事項一六の場合―　語文研究　第十八号　昭和三十九年　八月
平安時代語の語法　―助動詞「なり」と「めり」の世界―　国語と国文学第三十九・十号　昭和三十九年　十月
三宝絵詞東大寺切の研究　―関戸家本の本文と用字―　創立四十周年記念論文集　昭和四十一年　一月
「今昔」考　―説話の時制と文体―　国語国文　第三八三号　昭和四十一年　七月
万葉集における聴覚表現の構文　―視覚表現との交渉―　沢瀉博士喜寿記念万葉学論叢　昭和四十一年　七月
伝聞推定の助動詞「なり」の周辺　国語研究　第九号　昭和四十一年　九月
前田家本日本霊異記の性格　―「師自夏牟之」考―　文学研究　第六十五輯　昭和四十二年　三月
「昔」と「今は昔」　―「今昔考」補説　語文研究　第二十四号　昭和四十二年　十月
興福寺本日本霊異記に見える徴字の訓釈について　福田良輔教授退官記念論文集　昭和四十三年　十月
説話文体の効用　―「今昔考」の終りに―　文学研究　第六十六輯　昭和四十四年　三月

「侍り」と「候ふ」の分布より見た「法華修法一百座聞書抄」の文体　佐伯梅友博士古稀記念国語学論文集　昭和四十四年　十月

伊勢本節用集の一系譜　—玉里文庫本と竜門文庫一本—　語文研究　第二十九号　昭和四十五年　十一月

慶長十五年聞書　貞享三年書写　五逆秋（無門関抄）の国語学的研究（二）　文学研究　第六十八輯　昭和四十六年　三月

漢文訓読と終助詞「かし」の問題　語文研究第三十一・三十二号　昭和四十六年　十月

九州大学蔵「金剛頂瑜伽経第二」古点より　訓点語と訓点資料第五十四号　昭和四十九年　五月

仮名遣ひ以前　—古筆の表記について—　語文研究　第二十七号　昭和四十九年　八月

万葉集と存在詞　—上代の形容動詞とガル語尾—　武蔵野文学第二十二号　昭和四十九年　十二月

説話構文について　文学研究　第七十二輯（創立五十周年記念論文集）　昭和　五十　年　九月

万葉集の末句三題　上代語論集　昭和　五十　年　十月

三宝絵詞東大寺切追考　—「おそる」の活用など—　大坪教授退官記念国語史論集　昭和五十一年　五月

関戸家本三宝絵詞東大寺切の本文について　—「説話の語文」補正—　文学研究　第七十四輯　昭和五十二年　三月

蘇悉地羯羅経古点の一本より　国語国文　第五一二号　昭和五十二年　四月

On the Development of the Definitive in old Japanese (outline)　Bulletin of the Faculty of Literature Kyushu Unive　1959. 10

Tense and Style in Ancient Japanese Narratives　Bulletin of the Faculty of Literature Kyushu Unive (12)　1968. 3

以上主要なるもののみの抄出

春日先生との二十余年

春日和男先生が、停年の故を以て我々の教室を去られてから、すでに二か月である。先生のお部屋の入口にはもうさっそく他の教官の名札が掛っている。毎日その前を通って隣の私の部屋に入るたびに、今なおそのドアの向うで、美しい白髪の先生がまっ直に背をのばされ、端然と書見をなさっているお姿をまざまざと見、ドアをノックすれば、すぐに「はい、はい」と明るく軽やかなお声が返ってくるようだ。清雅とか穏厚という文字は先生のために作られたのか、と思うことが、私にはしばしばあったが、それも、こういう先生のさりげない日常のお姿の印象によるのであった。

しかし清雅・穏厚は、同時にそのまま先生の学問の風姿でもあられるようだ。私はそれを十分に論ずる資格には欠ける人間だが、この印象に狂いはない、と信じてはいるのである。それは御尊父政治先生の血を継がれたものであることはもちろんだが、しかしその底には先生の学問に取り組まれる烈しい気魄が秘められていることも、先生を知るすべての人が常に感じ取っていることであろう。先生は、授業の前日には、その下調べのためしばしば徹夜されるという。この一事がすべてを物語っている。

また先生は、「私は人と争ったことがない」と言われた事がある。そして、長い年月の間、私が拝察したところもたしかにその通りであった。声を励まし、あるいは色をなされた先生を、私は嘗て知らない。その事にあまえていつも勝手な事を申し上げていたのは私であり、今にして痛く恥じ入るばかりである。

先生の九州大学御勤務は、延々二十九年に及び、その受講生の数は学科専攻生だけでも四百人に達する。御尊父政治先

生が、大正十五年国語国文学科創設以来、戦前までの教室のいわば生みの親であられたとすれば、御子息の和男先生はその後を受け継がれて、戦後の九大国語国文学科教室の育ての親であられた。われわれの教室の学界に於ける評価は、近年ようやく定まったかに見えるが、それには、父子二代に亘られる春日先生の御力の甚大なるものがある事を今さらに思わざるを得ない。

今、こうしてあとに残された者たち一同、この学恩の万一に報じ奉るせめてもの心意気の一端として、この特集号は編まれた。もとよりささやかなものながら、謹んで先生に献呈させていただきたい。幸いに、御嘉納あらんことを。

なお、最後に、春日先生が今後ますますお元気に、学界に御活躍なさいます事を、心からお祈り申し上げます。

今　井　源　衛